

連載 誇り・味方・居場所 ——私の社会保障論



第3回

家族に気兼ねし、死を選ぶ社会とは

政策に切り込んだ社会派番組から抒情豊かな作品まで、山陰放送記者の谷田人司さんは、その掘り下げた仕事ぶりが高く評価されていました。

その谷田さんに、2007年、不治の病、筋萎縮性側索硬化症（ALS）が襲いかかりました。視力、聴力、感覚、知力が保たれているのに、手足や喉、舌を動かす筋肉が痩せ細り、最後には呼吸筋が動かなくなって死に至る恐ろしい病気です。

人工呼吸器をつければ寿命を全うできますが、日本では生きることを諦め、つけない人が7割と推定されています。理由の多くは「介護の負担で家族に迷惑をかけるのがつらい」。

ところが、デンマークの友人たちに聞くと、「考えられない」という答えが返ってきました。家族や友人の精神的な支えは大切だ



記者時代の谷田人司さん

としつつ、介護や看護の公的な支えが当たり前とされているからです。

谷田夫妻は、2年目から人工呼吸器をつけ、障害者自立支援法などを活用し、デンマークに近い24時間対応のサ

ービスを受けています。わずかに動く指でパソコンを打ち、培った人脈を生かして企画を提案。山陰放送は、谷田さんを社員として遇し続けています。

東日本大震災が起きた時、谷田さんは被災したALSの先輩、土屋雅史さん取材しようと思い立ちました。メールで交通機関の手配や取材交渉を進め、バッテリーを載せた車いすで仙台へ向かいました。「記者の意地です」。

取材で谷田さんは、震災で停電が5日も続く中、近所の人たちが発電機やガソリンを持ち寄り、交替で手動の呼吸器を動かし、土屋さんの命をつないだことを知ります。「1日を大事に生



ALS発症後も電動車いすで取材活動を続行

きれば良い」という土屋夫妻の言葉に、谷田さんは「共に生きる意義を再認識しました」と振り返りました。

ALSが進行すると、体のどこも動かず、全く意思表示できない完全閉じこめ症候群(TLS)になる可能性があります。それでも生きることに意味があるのか――。

答えを探しに、谷田さんは東京都小金井市の鴨下雅之さん一

家を訪ねました。雅之さんは家族にとってかけがえのない夫であり、父親であり続けていました。妻の章子さんは「遺影に言うのとは違う。聞いてもらえていると信じているので、幸せです」と語りました。

その取材の一部始終を、後輩のディレクター佐藤泰正さんたちが、「生きることを選んで」という番組にまとめ、2012年2月に放送しました。この記者魂に、第1回の日本医学ジャーナリスト協会大賞^註が贈られました。「家族への気兼ねから死を選ぶことのない社会にするための捨て石になれば」という谷田さんの言葉が、重く響きました。

<8年たって>

人司さんの病状は進み、いま、完全閉じ込め症候群の状態にあります。意思を伝えることはできなくなりました。

けれど、家族は、「パパは、いまも、私たちを守ってくれている」と信じています。

2人の子どもは結婚し、生れた孫を人司さんにみせています。

夫人は、「僕のために仕事はやめないで」という人司さんの言葉を守り、高校教師を続けながら見守り続けています。

註：日本医学ジャーナリスト協会賞

NPO日本医学ジャーナリスト協会が25周年を記念して創設。第1回協会賞が2012年10月に発表された。大賞は、他に下野新聞の「終章を生きる 2025年超高齢社会」。特別賞に、タバコ問題情報センターの月刊紙「禁煙ジャーナル」と、NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボの月刊誌「こころの元気+ (plus)」。いずれも、社会にインパクトを与え、挑戦精神に富んだ独創的な作品。

編集部註

本連載は、小社から刊行している『誇り・味方・居場所—私の社会保障論』(2016年3月10日発行)から選択して掲載しております。初出は毎日新聞朝刊に月1回掲載された「私の社会保障論」(2011年5月~2013年9月)です。したがって、記事中の人物・名称・活動・事物などで現在は亡くなっている方や変化している場合もありますのでご了解のほどお願い致します。



『誇り・味方・居場所』

大熊由紀子著

B6判変型 定価 1,600円+税

*単行本

<http://lifesupport-co.com/order33/books.html>

*電子版

<http://www.shinanobook.com/genre/book/3443>